

## 第2回 インフォームド・コンセントについての基本的な考え方

久山 昌之 久山獣医療病院

### ■ インフォームド・コンセント(IC)とは

インフォームド・コンセント(informed-consent: IC)とは「説明と同意」と訳されますが、本来の意味は「納得診療」ということです。飼い主さん(患者さん)が獣医師(医師)などから診療の必要性と診察内容、診療方針、検査結果などについて十分な説明を受けた上で、その人の自己決定権を尊重した獣医療(医療)を行う事です。

特別なことと思われがちですが、本来であれば当然行われるべきことで、なぜ今更注目され、徹底することを呼びかけられ、徹底していることを告知しなければいけないのか、はなはだ疑問です。

僕が最初にこの言葉を知ったのは20数年前の学生時代、父が読んでいた岩波新書のタイトルからでした。やはり昔の診療体系では不十分であったこと、今後見直さなければいけない事を気にしていたようです。出身大学ではこの単語すら教えられませんでした。これは臨床の教育が不十分であったためと思われる。大学病院では行って当たり前という環境でしたので、特別な教育はありませんでした。診療や治療をする立場になってからも、「飼い主さんに知っておいてほしい、むしろ知っていなければいけない」という思いが強いため、ICのない診療はやれと言われてもできません。

### ■ ICが十分に行われない理由(獣医師側)

ただし、実際にはICを怠っている、または不十分といったことが多いと言えます。十分に行うにはしっかりした知識や技術、倫理、信念、柔軟な考え方、さらに時間も必要になります。目的が「診療の充実」なのでから当たり前です。

飼い主さんに100%理解して頂くには、説明する側は150%の事を知っていなければできません。また、いろいろな情報や事柄に精通し、状況ごとに対処できる柔軟性も必要です。営利主義に徹した場合、あるいは一人当たりの飼い主さんにかかる時間の短縮を優先した場合、

ICに料金は派生しませんから、時間ばかり「無駄」にして損だと考える獣医師もいるのです。

### ■ ICが十分に行われない理由(飼い主側)

もうひとつ、徹底されない理由があります。飼い主さんが言いなりになってしまう、説明がなくても気にしない、質問しない、相談しない、不勉強であるということです。中には、病院や獣医師の雰囲気・応対のために質問や相談をしたくてもできない、させてもらえない、という状況も多いようです。

こんな時は、まず獣医師や病院スタッフが質問や相談をしやすい環境を作ること、そしてなぜICが大切かを理解してもらうことが重要です。

病気について獣医師任せの発言をする飼い主さんに対しては、以下のような流れで説明していくとどうでしょうか。

#### 飼い主さんとのやりとり 1

飼い主さん(以下O): よく分からないので、もう先生にお任せします

獣医師(以下V): ○○ちゃんを守る最後の砦は飼い主さんです。しっかり説明を聞いて、わからないところは質問・相談し、納得してから診療を受けましょう。今まででもご相談されたことはないのですか?

O: 先生も忙しいようですし、なんだか申し訳なくて

V: 先生の顔色やご機嫌なんて気にする必要はありません。気にしなければいけないような病院は、仮に知識や技術はあっても、良い病院ではありません

O: 本やインターネット、公園での集まりとかで勉強してみましたが、いろいろ聞くと情報が多すぎて混乱してしまいます

V: 飼い主さんご自身の勉強も必要です。説明を理解する、質問できる知識を持つておくことが大事で、これできていなければ判断することすらできなくなってしまいます。最近よく言われる、“知るワクチン(必要な情報を収集し、要因・機序を理解し、具体的な対策を取っていくこと)”というものです

## IC を行う場合の内容について

IC はどのような内容について行うのでしょうか？  
具体的にみていきましょう。

例えばある病気について飼い主さんにお話する場合、以下の3点からICを行うことになります。

1. 現在の獣医療ではどのように診療するか教科書的な内容および最先端の医療について
2. 現在の病院で行える診療の内容について
3. 獣医師が勧める診療の内容とその理由（場合により紹介する大学病院や専門医）について

しかし、問題はIC自体が情報の垂れ流し、偏った情報の提供、決定権の丸投げ、おしつけ、言いなりなどといった中途半端な行為になっている場合です。

現在はITが普及して情報が氾濫し、かつ無責任なものが多いのが実情です。HPや書籍などでも、思わず目を疑う情報が平気で専門家から発信されていたり、論じられていることが多々あります。情報過多に陥っている飼い主さんに「何を頼りにすればよいのか？」と聞かれることもしばしば。そんな時に僕がよくする飼い主さんとのやりとりをご紹介します。

### 飼い主さんとのやりとり2

O：自分で勉強したり、飼い主同士で話をしたりすると情報がバラバラで“おかしいな”と思うことも多いのですが

V：飼い主さん同士の情報交換も、大半は誤ったものが流布されることが多いようです（「もちろん、貴重な意見もあるのですが」と付け加えて）

O：でも、うちと同じ経験をされた方がいらっしゃって、教えてくださるんです

V：いろいろな方の体験談を聞くのもいいのですが、時には曲者となる場合もあります。何も悪意があってやっているわけではなく、大半の方は役立とうという気持ちからいろいろと話してくれていると思います。要するに、10匹の動物がいれば、10通りの生活環境や体質、性格、飼い主さんがおり、同じ病気でも10匹いれば、10通りの診療や治療の方法があるのです。ですから、1匹の体験はあくまでその子にとっての体験で、他の子にも当てはまるというわけではないのです

O：では、どうやって勉強したらよいのでしょうか？  
全て間違っているのでしょうか？

V：そのような情報をすべて無視しなさい、ということではありません。情報過多の今日、それを見極めるように、ある程度の勉強や見る目を養っておかないといけない、ということです。これは、実は動物についてだけではなく、残念ながらすべてにおいてそ

のような社会になってしまっているようです。そんな中で、ひとつの方法としては、やはり信頼できる主治医を見つけ、まずはその先生にいろいろな疑問や不安、情報などを質問、相談し、ご自分の指標のひとつとして利用してしまうことです。また、相談している間に信頼できるかどうかがある程度判断できてくると思います。飼い主さんには一石二鳥だと思のですが、いかがでしょうか？

O：今までも不安になると、病院を転々としてしまっ  
V：セカンドオピニオンを求めることも、ある意味ICの徹底ではないでしょうか。ただし、動物病院の場合、技術や知識、設備、考え方など格差が著しく、また病院ごとに役目がはっきりしていません。中には、セカンドオピニオンでさらに混乱や悪化に陥った飼い主さんたちも多くいらっしゃいます。そのような場合は、まず先に主治医に正直に申し出て、現状についてしっかり相談してください。その上で希望されるなら、病院を紹介して頂くのもひとつの方法です。また、ネットなどで質問するのも良いでしょう。ただし、良いHPを見つけないと先ほど申し上げたような混乱が起こりますので、注意してください。正真正銘のICが、どの病院でも受けられる、安心して診療が受けられる、そんな日が来ることを願います。これは、我々獣医師の命題でもあります

いかがでしょうか？

特に第1回で述べたとおり、麻酔についてはそれこそ風聞や不幸な経験から飼い主さんが誤解を受けていることが多いため、理解が得られない場合は麻酔では

なく、もっと根本的なICについてや風聞についてのお話が効果的です。ただし、普段からこのような徹底が行われている病院であれば、そこまで詳しく行う必要はないでしょう。

次に麻酔に関するICについてお話していきます。

## 全身麻酔を行う上でのICについて ～知っておくべきこと・お話しすべきこと～

### ■麻酔時に行うICの目的

- ・飼い主さんの根拠のない恐怖心や不安の排除
- ・簡単に考える飼い主さんへの警告とその理由
- ・誤った情報の訂正
- ・正しい知識と理解～特に安全性と危険性を正しく伝えること
- ・現在の病状や体調、危険性、予後などの説明
- ・今回選ぶ麻酔法とその理由、方法、問題点
- ・実施する処置についての具体的な説明
- ・より良い医療を行うための相談と同意
- ・医療への飼い主さんの参加
- ・現状での問題点とその予防、対処、管理について

### ■麻酔の目的

鎮静処置も麻酔処置に含むとすると、その目的にはまず「動物の不動化」ということが挙げられます。不動化を必要とするのは以下の目的のためと言えます。

- (1) 処置や検査、生検など、特にその中でも侵襲を伴う医療行為を行う際に、動作や緊張により無麻酔での処置が不可能、または極度の興奮や過度の緊張、それに伴う生体反応により無麻酔での処置が危険である
- (2) 外科手術(実際は動かさないことが目標ではなく、安静にすることが目標)
  - ・処置中の過度な興奮や緊張を避ける
  - ・処置などに伴う苦痛を軽減する
- (3) 発作や興奮、過度の運動の制限・鎮静化(治療法の一環として)

それでは麻酔処置を行う上での注意点をみていきましょう。

### ■麻酔処置を行う時の注意点

- (1) 十分な鎮痛効果を有した、安定した麻酔(鎮静)状態を確保すること
- (2) 麻酔処置を受ける動物の体質や体調、病状にあった麻酔法を選択すること
- (3) 処置中の負の反応に対して、できる限り予測と対策を準備しておくこと。必要があれば、術前

より治療を行い、変化には早急に対処する

- (4) 身体への負担や副反応を極力少なくし、しっかりコントロールすること
- (5) モニタリングを含めた周術期管理をしっかりと行うこと
- (6) 術後管理、特に疼痛管理を徹底すること
- (7) 麻酔記録をとること
- (8) 麻酔の反応や結果について考察を行うこと
- (9) 麻酔事故と考えられる症例の検討と統計を取ること

すべてを飼い主さんに説明する必要はなく、要点を簡潔に、自身の考えと飼い主さんの反応を見ながら、ある程度の総論として話すと思います。

### ■「麻酔」という行為についての捉え方

「麻酔は、「生」よりも「死」に近づける行為である」

これはあくまで極端な言い方で、本来麻酔は深い眠りであり、「身体を休める」と言った方が正しいでしょう。むしろ、麻酔処置が必要であるにも拘らず、活発な生体活動を行っている身体に麻酔処置を行わないことは、さらに危険や負担が増してしまう可能性があります。

麻酔の大半は、手術という治療行為の一部の処置法です。麻酔の他にも疼痛の緩和や発作・興奮の鎮静化などがあり、これらの治療法がなければ身体の安全性や快適性を保つことはできません。

もちろん、麻酔に負担がまったくないというわけはありませんが、現状では麻酔をかけない痛みや苦しさの方が動物にとって負担であり、麻酔を含む治療の必要があるという前提の中で、最大限安全性を高め、負担や危険性を減らす努力が大切です。

麻酔をより安全に行うために、術前検査と継続的な検査、治療、麻酔計画、適切なモニタリングと周術期管理を行います。また、術後も必要であれば継続的あるいは定期的な検査、治療を続けます。

麻酔は、複雑な仕組みと生体反応、調節機構によって良好な状態を保っている生命と身体(生体恒常性)に対して、薬剤や機器を用いることで変化を加える行為です。特にこの変化をコントロールしようとする試みであるため、そこにさまざまなリスクが存在します。例えば、手術における出血や痛み、投与される薬剤や麻酔手技、周術期(術前・術中・術後)の変化しやすい機能などが挙げられます。

上記のようなお話を飼い主さんにしっかり行うこと

で、飼い主さんの不安要素や間違った知識が浮き彫りになり、さらにそれを解消することによって安心感と信頼関係ができていきます。

## ■麻酔の危険性について

麻酔の危険性という「麻酔事故」がまず頭に浮かびます。この発生率は、今になっても尚正しい統計調査がありません。進んで報告するという体制ができていない上、起きてはいけない事態に対して、「隠したい・目をつぶりたい」という意識が獣医師側に働くためと考えられます。また、中には事故であっても事故と認識されていないケース（一番怖いパターンです）も多いのではないのでしょうか。原因の判定（事故か防ぎ得ない症例か）、発症時間や症状などどこまでを事故と考えるか、死亡例だけを考えるのかなど、解釈に差があるという事実も統計を取りにくい原因のひとつと言えます。

本来は、事故や失敗をしっかりと認めることで客観的に報告を分析し（症例ごとに種別や性別、年齢、体重などの基礎情報と、手術や処置の部位や種類、病歴、既往、手術・麻酔記録、麻酔方法、治療内容、輸血の有無など）、原因を突き止め、再発防止策の検討や体制の構築、事故を少なくする努力をすると共に、頻度をしっかりと把握することで、麻酔についての情報を的確に開示することができます。これだけの努力をしても「この頻度で起こるんだ」という自信と自覚が必要だと思います。

ただし、これはあくまで人為的要因、つまり獣医師や病院スタッフ、一部の飼い主さんの管理や技術、設備の不足や過失、欠陥などの無過失が原因の事故についての話です。本来の麻酔の危険性とは、不備のない麻酔を行いながら、何らかの原因で生命危機状態に陥ること、および後遺症や術後疾患の発症だと考えられます。合わせて、特に麻酔薬や補助薬は、予測し得ない生体反応を引き起こす危険が高く、また麻酔が起こす恒常性の損傷は強力です。

このような事例に当てはまる良い単語が見つからないため、僕は説明の際、事故を除いた原因による「麻酔関連偶発症例\*」と表現しています。

人医分野において、アメリカでの統計の麻酔死は、1万件に1～5例程度というものもあり、保険会社の賠償請求のうち麻酔事故に関わるものは5%前後というものもあります。僕が以前聞いた話では、獣医分野での事故を除いた偶発症例（麻酔水準の高い施設で）は500～1000件に1～2例くらいでは？ というものがありました。

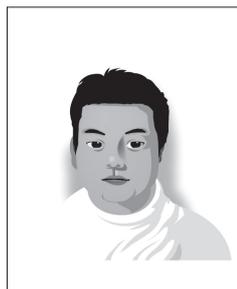
事故とそれ以外の区別をはっきりとさせ、それぞれなぜ起きるのか、どのように予防・対処をしていくのか、自院での発生率や事象などをしっかりお話ししましょう。また、今回処置を行うに当たっての問題点、その対処法も明確にしておきましょう。

※麻酔関連偶発症例：原因の如何に問わず、麻酔がかかっている状況下で生命危機状態となった症例。（社）日本麻酔科学会より引用

### 麻酔を安全に行う際の留意点

- (1) 安全かつ適切な麻酔計画と麻酔法、およびその実施と体制
- (2) 経験を積んだスタッフと十分な意思の疎通、精通した麻酔法の採用
- (3) 麻酔機器・モニタリング機器操作の精通と正しいデータの解析、周術期管理
- (4) 術前状態や病状、体調、体質、病歴、既往歴の把握
- (5) 緊急時の対策と熟練した対応
- (6) 冷静な判断と適切な対応、集中力の持続
- (7) 記録

以上を自分に合った形でまとめ、かつ飼い主さんに合わせて説明するという原則を踏まえ、今回は麻酔のICについての具体例をご紹介します。



### 久山 昌之（くやま・まさゆき）

1991年 日本大学農獣医学部獣医学科卒業  
91～93年 東京大学農学部附属家畜病院獣医外科学教室研究生  
93年～ 久山獣医科病院副院長

今回の内容は、少々くどさや細かすぎると感じる部分があると思います。もちろん、これは全て患者さんのためなのですが、細かくしっかり話し合うことで、こちらも飼い主さんを理解することができ、充足感と安心感を得られます。麻酔処置や手術の時に、余計なことに煩わされずに集中するには、これがいちばん！ ただし、お話しする場合は難しく厳しい話をいかに分かりやすくするか、そして所々に息抜きも入れること、これが重要です。オン・オフをしっかりと分けて、これはなんにでも大切なんですね。それでは僕は原稿から解放されて、オフを楽しめます…、また酒か。